

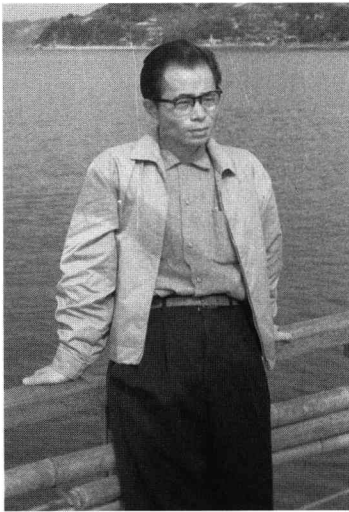
坪井洋文氏撮影葬儀写真資料

Photographs of Funeral Services Taken by Hirofumi Tsuboi
SHINTANI Takanori

新谷尚紀

はじめに

國學院大学所蔵の資料の中に、もと国立歴史民俗博物館教授で初代民俗研究部長であった坪井洋文氏(旧姓郷田洋文氏)が撮影した昭和30年代初頭と思われる広島県山県郡旧大朝町岩戸地区(現在は北広島町)の葬儀の写真がある。その坪井洋文氏撮影の写真ネガは遺族から國學院大学折口博士記念古代研究所に寄贈され、同研究所の所蔵となっているが、これは民俗学や歴史学の葬送習俗研究資料としてひじょうに貴重なものであり、今後の研究に資するに意義ありと考えてここに紹介しておくこととしたい。坪井氏の略歴は表にみるとおりであるが、1961年(昭和36年)に坪井寿子さんと結婚してもとの郷田姓から坪井姓へと改姓している。この写真は郷田氏(のちの坪井氏)が30歳前後に母方の祖母の葬儀に参列した際に撮影されたものである。正確な年次は不明であるが、写っている写真の風景や人物からは昭和32年(1957年)以後、昭和35年(1960年)以前と推定される。まだ30歳前後で國學院大学の日本文化研究所の非常勤研究員になったところと思われる。実は郷田氏(のちの坪井氏)と筆者は、同じ広島県山県郡旧千代田町(現在北広島町)の出身で、学校も旧大朝町(現在北広島町)の新庄学園(中学校・高等学校)の先輩後輩の関係にあるために、その坪井氏の残した葬儀写真の資料情報についての追跡調査が比較的できやすい関係にあり、2013年1月～3月にそれを試みることができた。現在も新庄在住で坪井洋文氏の従兄弟にあたる郷田信夫氏(昭和14年生)と澄子氏のご夫妻には数多くの貴重なご教示をいただいた。また坪井洋文氏の妹の織田二三江氏とそこご主人の元美土里町町長の織田邦夫氏、そして坪井洋文氏の両親にとって大本家に当たる盤門地区の宮庄家(屋号トンダヤ)の当主で現在新庄学園理事長の宮庄良行先生からは特別に貴重なご教示をいただいた。ここにあつく感謝申し上げるとともに、そのご教示いただいた結果を記し報告しておくことにしたい。そして、この写真資料の紹介について学術的な意味からのご理解とご許可をいただいた國學院大学の小川直之教授と、その門下の國學院大学大学院卒業生で、当時北広島町立民俗芸能保存伝承館嘱託学芸員として多くの協力をいただいた森悦子氏(現在東京都調布市郷土博物館学芸員)、そして北広島町教育委員会の六郷寛氏をはじめとする北広島町関係者の理解と親切と協力があったことをここに特記して、あつく感謝の意を表しておきたい。



1957年頃



1986年頃

故人 宮庄セキヨさん（屋号トミヒロ）。坪井洋文氏の母方の祖母で宮庄兼一氏の妻。

実家と家族 郷田洋文氏（1929年・昭和4年生）の実家は広島県北広島町（旧千代田町）今田にあり弟の力氏つとむが現在はその家を継いでいる。妹の二三江さん（1933年・昭和8年生）は新庄女学校に通っていたが、学制の変更があったため三年生で八重高校へ編入学して、その後短大へ行って家庭科の教員になった。筒賀の中学校と都谷の中学校で教えていたが、高田郡で家庭科を教えていた先生の紹介で見合いをして、昭和38年（1963年）に高田郡美土里町の役場職員織田邦夫氏（1932年・昭和7年生）と結婚した。その後、夫の織田邦夫氏は美土里町町長を長くつとめ二三江さんは家庭でのそのよき理解者、協力者であった。2013年1月にその織田氏ご夫妻から話を聞くことができた。その話によると、二三江さんの兄の洋文氏が予科練を志願して戦争へ行った事について、父親の照夫氏は「洋文はああいう風に育ってしまった」と独り言のように言っていたという。大切な長男である洋文氏が戦争へ行くこと、戦死の危険があることに、父親として複雑な気持ちがあったのかと思う、と二三江さんはいう。洋文氏が戦後に家に戻ったころは、二三江さんはもう実家を出て寄宿舎にいた。洋文氏の子ども時代の印象は、本をよく読んでいたということで、妹への気配りはあったが、あまり外向きの人ではなかったという。一緒に何かして遊んだような記憶はない。洋文氏が東京へ進学したいと言ったことについては、父親の照夫氏は「したいようにしたらいい」と言っていた。戦争から生きて帰って来れたので、それよりはずっといいと思っていたようだ。二三江さんの夫の織田邦夫さんがいうには、洋文氏が東京へ出たのは、柳田國男への憧れがあったからだろうという。実家は弟の力氏つとむが継ぎ、末妹の夏枝さんは近くの有間の書籍及び文房具店の西原天下堂の向かいの西原さんと恋愛結婚して今は関東の横浜に住んでいるという。

両親 郷田洋文氏の両親は旧新庄村（現在北広島町）岩戸の本谷の出身で、比較的早く旧八重町（旧千代田町で現在北広島町）今田に転出した。父親の郷田照夫氏が分立したその分家は屋号をカサヤ（傘屋）といい、その実家は同じ本谷の郷田姓で屋号をカワチヤという家である。そのカワチヤの家は照夫氏の兄の重雄氏が跡をとり、現在は重雄氏の長男の信夫氏（1939年・昭和14年生）が跡を継いでいる。その信夫氏と澄子氏夫妻に2013年1月、2月に話を聞くことができた。そのカワ

チの郷田家の本家つまりこの地域の郷田家の本家は隣奥すぐに隣接している盤門という集落の屋号をヨコカワ（横川）という家である。洋文氏の母親の愛美^{あいみ}さんの実家は、夫となる郷田照夫氏の実家がある同じ本谷の屋号をトミヒロ（富広）という宮庄家の分家であるが、その本家は盤門の有力家である宮庄の本家である。その宮庄の本家の屋号はトンダヤ（富田屋）といい代々この地域での有力な地主層の旧家である。宮庄家も郷田家もいずれも本家は盤門という岩戸のいちばん奥の集落の盤門という集落の家どうしである。ただし、盤門は岩戸の本谷と隣り合っているものの、行政的な地域としてはむかしから岩戸ではなく宮迫の中に含まれる集落である。

宮庄家と郷田家の孫 郷田洋文氏は、幼少期はその実家の旧八重町（旧千代田町で現在は北広島町）今田で育ち中学校は新庄中学校（旧制）に通った。しかし、15歳のときに予科練を志願して山口県防府市の海軍予科練に入隊している。敗戦によって16歳のとき中学4年に復学するが、卒業後は高田郡吉田町の広島青年師範学校を出てから中学校壬生教場で短い教員生活をしている。そして、考えるところあって上京して國學院大學に編入学して民俗学の道に進むこととなるのだが、そのもともとの本家筋をたどっていけば、旧新庄村盤門の有力家である宮庄家（トンダヤ）とその同じ集落の本家筋の郷田家（ヨコカワ）の孫にあたるということになる。

【写真解説】

- 写真1～5 屋内に寝かせてある遺体。横からの撮影。畳の部屋に莫塵を敷き、その上に布団を敷いて遺体を寝かせ、上から白い布がかけてある。顔には白い布が被せてある。枕元にはローソクの火が灯されている。
- 写真6～7 屋内に安置されている遺体。足元から上方へむけての撮影。
- 写真8～9 この地域で一般的に喪家の前庭に設置される一對のノドウロウ（野灯籠）。細竹に紙垂をつけたもの。この喪家は宮庄家の分家で屋号トミヒロ。故人のセキヨさんの家で、坪井洋文氏の母親の愛美さんの実家である。
- 写真10～11 宮庄家（トミヒロ）の家屋敷の前方左上の斜面に祭られていたテンノミヤと呼ばれていた小祠。こののちに氏神の八栄神社に合祀された。
- 写真12～13 喪家の宮庄家（トミヒロ）の前庭。この地域で一般的にみられる喪家を表わす一對のノドウロウ（野灯籠）が立ててあり、玄関わきには番傘が3本立ててあるのがみえる。また、庭先で放し飼いのニワトリが飼われているのもわかる。写真の手前右にはオートバイがみえ、左にはわずかだが、昭和30年代初頭から発売され始めていた軽三輪自動車のダイハツミゼット（1957年～1972年製造販売）がみえる。
- 写真14 葬儀参列者のスナップだが、当時発売されていた軽三輪自動車のダイハツミゼットが写っている。ミゼットの手前の後ろ姿の人物は洋文氏の父親の郷田照夫氏。この家の後継ぎであった正行さんは愛美さんの弟であるが、この後に一時新庄の町でモータースの店を開くなど、新しいオートバイや軽自動車に関心が高かったという。この時期にこの岩戸のような田舎でオートバイやダイハツミゼットを購入しているのはたいへん早い例といってよい。
- 写真15 秋の稲刈りのあと稲の乾燥のためにハデ（稲架）に稲束がかけてある。

-
- 写真 16 水田の肥料としての堆肥作り。葬儀には直接は関係のないものでも、当時 30 代初頭の若き坪井洋文氏の関心のあり方がうかがえる。
- 写真 17 洋文氏の父親の郷田照夫氏の後ろ姿。
- 写真 18 古くからのハデ（稲架）はこのように高く組み立てられていた。写真 15 の方は昭和 30 年代から普及してきた簡単な作りのハデ（稲架）。
- 写真 19 写真 15 と同じ比較的簡単な新しいタイプのハデ（稲架）の骨組み。それまで掛けられていた稲束が乾燥したのではずされたところ。
- 写真 20～23 喪家の表座敷に安置された棺。正面の一对の白い紙でできたシカバナは講中の人たちが手作りするものである。地元の人たちによると、その外側の造花一对は業者の提供と思われる。この棺と飾りはこの地域の通常のものではなく、屋根の鳥形などはこの地域ではみられない装飾であり、これは特別に業者に頼んだ豪華なものだろうとのことである。洋文氏の母親の実家にとって有力な本家のトンダヤの支援が大きかったものと思われる。棺に向かって右側に見えるのは、故人のセキヨさんの夫で喪主の兼一さん。
- 写真 24 喪家の前方の景色。向かって右の山沿いにこの岩戸の本谷地区のノベ（火葬場）に行く小さな道がある。
- 写真 25～26 故人の孫たち。喪家の宮庄家（トミヒロ）の後継ぎの正行氏とその妻の慶子さんとの間の三人の子ども。洋文氏にとってはいとこの関係。写真の後上方に見えるのはテンノミヤと呼ばれていた小祠。
- 写真 27～28 オイコと呼ばれていた背負い子の一種。
- 写真 29 そのオイコで稲藁を集めたもの。
- 写真 30 古い土蔵の錠前。
- 写真 31 紙に書かれて貼り出している「御手傳」の金額。香典とは書かれていない。「宮庄英治 五千円、郷田照夫 五千円とあるが、宮庄英治氏はもと宮庄本家のトンダヤの長男である。この時点では宮庄分家（トミヒロ）の兼一氏の養子になっており、故人のセキヨさんからみれば養子である。郷田照夫氏は故人からみれば娘の夫であり義理の子どもにあたる。それが同じ五千円の「御手傳」を収めているということである。この写真を撮影した洋文氏の心境としては、その当時新庄学園（中学校・高等学校）の教諭となって帰っていた自分と仲のよい学友でもあり近い親戚でもある宮庄英治氏を通して自分も宮庄本家トンダヤの親族の一員であることを意識していた可能性がうかがえる。
- 写真 32 表座敷に安置されている棺とその前に坐る親族たち。
- 写真 33～36 喪家の縁側に開かれた帳場。この人は隣の藤川家の人で、聞き取り調査の 2013 年 1 月にはその数日前に亡くなられたばかりだと聞いた。本谷の講中の家からは布の袋に入れたお米一升ずつが納められる。これが葬式の間に炊かれるみんなの御飯の材料となる。
- 写真 37 小祠のテンノミヤの内部を写したと思われる写真。
-

-
- 写真 38 ~ 39 喪家の前庭。ノドウロウ（野灯笼）もみえるが、向こう向きのダイハツミゼットもみえる。
- 写真 40 帳場。
- 写真 41 ~ 42 出棺。棺を担ぐのは講中の当番の人4人で、順送りでの役をつとめる。
- 写真 43 ~ 44 葬列の出発。向かって左側で背を向けている人が新庄の小田寺の住職の小田丕昭師。その小田寺がこの宮庄家（トミヒロ）の門徒寺である。この広島県西北部のいわゆる芸北地方一帯は俗に「安芸門徒」といって、ほとんど全戸が古く藩政時代から浄土真宗西本願寺派の門徒である。それで住職も剃髪せず長髪の例が多い。真ん中が伴僧の石橋氏、それに傘持ち役の人がついている。
- 写真 45 ~ 50 葬列の出発、ノベ（火葬場）に向かう葬具持ちの講中の人たちと僧侶たちと棺と親族と参列者の一行。
- 写真 51 ノベ（火葬場）に向かう山道から水田を見下ろして、刈り取った稲を乾燥させるハデ（稲架）の風景を撮影した写真。季節は10月半ば頃と思われる。
- 写真 52 ノベ（火葬場）に到着して、これから行なわれる葬儀のために安置された棺。
- 写真 53 葬儀に当たって読経をする住職三名。中央が門徒寺の住職の新庄の小田寺の小田丕昭師、奥が地元の岩戸の明円寺住職の平田賢雄師、手前の若い住職が宮迫の連光寺の浅川師。このように三カ寺の住職に依頼するのは通常よりも丁重な費用のかさむ葬儀である。
- 写真 54 宮庄栄三氏とみつよ氏夫妻の焼香。宮庄栄三氏はこの地域のもっとも有力な旧家である宮庄本家（トンダヤ）の当主であり、家業の農業も手広く経営しつつ新庄学園（中学校・高等学校）の理事長職をも長くつとめた有力者である。夫人みつよ氏は新庄学園卒で日本女子大学に進んで国文学を学んだのちに母校に帰って国語科の古文の教師をつとめておられて、実は筆者も中学と高校でその教えを受けた教え子の一人である。
- 写真 55 参列者の焼香。
- 写真 56 ~ 57 葬儀を見守る親族。手前の老人が喪主の宮庄兼一氏、中のメガネの人物が長男の宮庄正行氏、その向こうが宮庄英治氏。
- 写真 58 参列者の焼香。
- 写真 59 郷田重雄氏と美津江氏夫妻の焼香。重雄氏は洋文氏の父親の照夫氏の兄。照夫氏の実家で屋号カワチヤの家の跡取り。洋文氏にとってはこの二人は伯父夫妻にあたる。
- 写真 60 手前左のハンカチを口にしている女性が洋文氏の母親の愛美さん。その向こうで頭を下げている男性が父親の照夫氏。
- 写真 61 新庄学園の校長の大槻正一氏（昭和28年1953年4月着任）の焼香。故人の養子の宮庄英治氏が新庄学園の国語科教師で、喪家が新庄学園理事長の宮庄栄三氏のトンダヤの分家でその支援を受けた葬儀ということで、学園関係者の参列者が多いことがわかる。
- 写真 62 新庄学園の国語科教師の三上重幸氏の焼香。宮庄英治氏の国語科教師の先輩である。
-

- 写真 63～65 新庄学園の男女生徒の焼香。担任の宮庄英治氏のクラスの生徒たちと思われる。
- 写真 66～70 講中の人たちの焼香。
- 写真 71 棺と火葬のための藁
- 写真 72～74 講中の人たちの焼香。
- 写真 75～76 葬儀を見守る右の背中姿が宮庄栄三理事長。左が洋文氏の父親の照夫氏。
- 写真 77～78 葬儀の終了で帰途につく人たち。
- 写真 79～80 棺と火葬のための藁
- 写真 81 別れを惜しむ遺族。左の女性が正行氏の妻の慶子さん。中央向こうでハンカチを口にしてるのが洋文氏の母親の愛美さん、その向こうのトレンチ帽の男性が父親の照夫氏。
- 写真 82 棺の蓋を開けての最後の別れ。
- 写真 83 棺の蓋を開けての最後の別れ。真ん中で数珠を手にして合掌しているのが愛美さん。
- 写真 84～86 講中の火葬当番の人たちによる火葬を始める前の準備の様子。
- 写真 87～106 ノベ（火葬場）から帰ったあとのオトキ（御斎）の飲食の様子。フラッシュがないために暗い画面になっているが、喪主の宮庄兼一氏、本家の宮庄栄三氏と夫人の宮庄みつよ氏、洋文氏の父親の郷田照夫氏、洋文氏の学友で故人の養子の宮庄英治氏たちの姿が写されている。

宮庄栄三氏の追悼文 抄

坪井氏の追悼文集『追討 坪井洋文』（坪井洋文追悼文集刊行会 編集発行・製作 未来社 1986）に、坪井洋文氏の早逝を惜しむ故郷の宮庄本家（トンダヤ）の宮庄栄三氏の追悼文が載せられている。その一部をここに再録しておくことにする。それも坪井洋文氏が残したこの写真資料情報の意味を考える上で参考になる情報だからである。タイトルは「坪井洋文君を偲ぶ」である。見開き2ページの文章であるが、その内からここで最後の8行分を引用しておく。以下がそれである。

「坪井君はあるいは性急なところがあったかと思っています。人生物心つく頃と申せば、二十歳でありましょうか。さすれば坪井君が研究に没頭し得た期間は、四十年に足りません。その間に民俗学諸般の研究をして、民俗学界の諸先輩の間に伍して坪井洋文の名を認められましたとしましたならば、大変な努力の積み重ねであったろうかと思っています。彼晩年の学界には数多の学者の中から選ばれて民俗学研究所の第一部長に就任したる如きは、最高の名誉であって、関係者一同の感激と感謝あるのみであります。しかしここまで来る間の彼の生活に於て、皆様へはその性格上、あるいは御無礼申し上げてはいなかったかと懸念され、各方面へ御詫びしてやり度く思っております。」

この宮庄栄三氏の文章は、親族の代表であり宮庄本家の当主として、また母校の理事長として、生前の坪井洋文氏の性格を若いころからよく知りぬいていた立場からのあいさつ、親心のあふれるあいさつとして読むことができよう。

（國學院大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2013年12月21日受付，2014年3月18日審査終了）

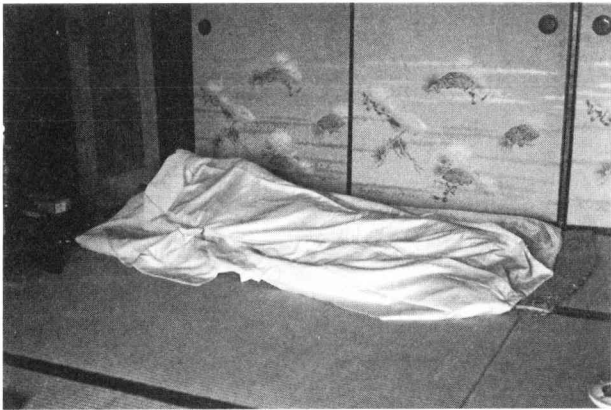


写真1



写真2



写真3

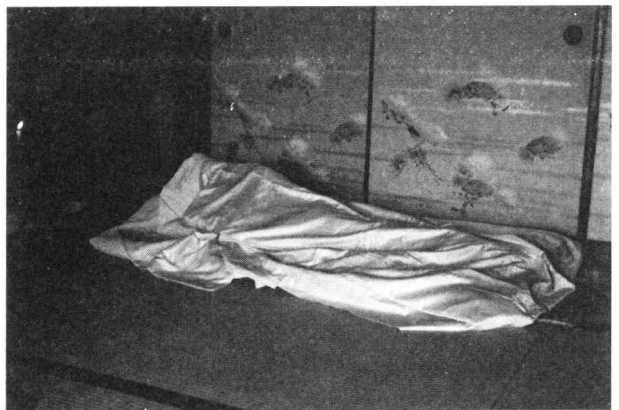


写真4

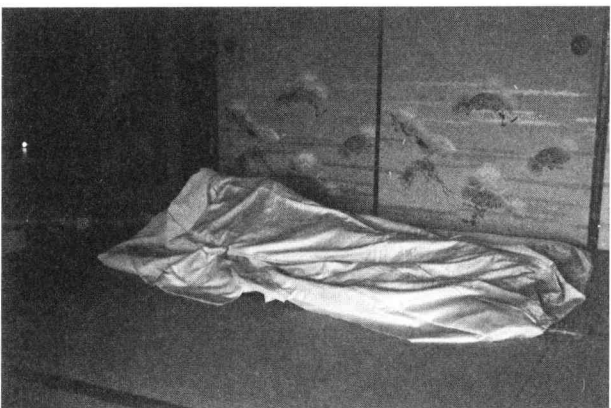


写真5



写真6



写真 7

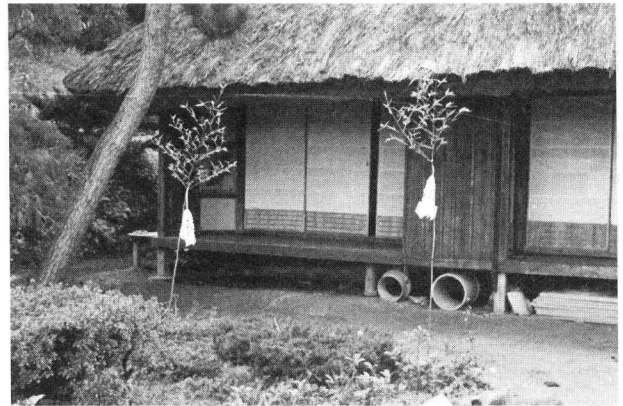


写真 8



写真 9

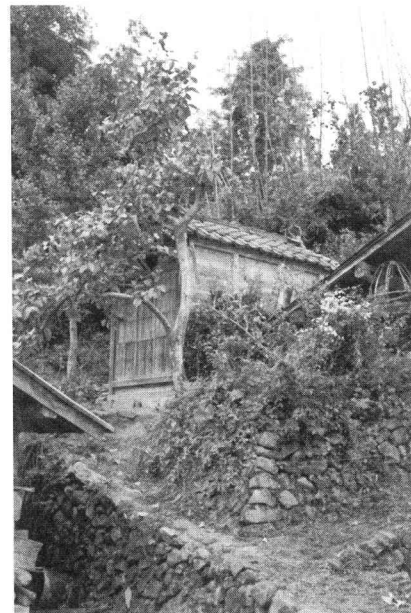


写真 10



写真 11



写真 12



写真 13

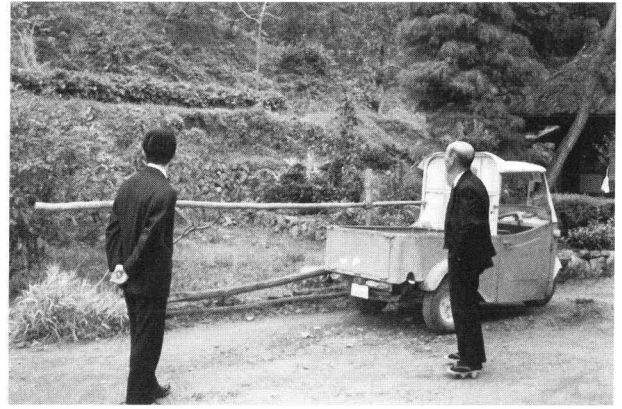


写真 14



写真 15



写真 16

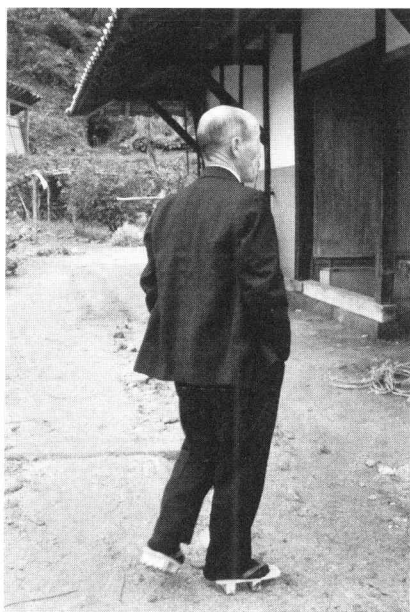


写真 17



写真 18

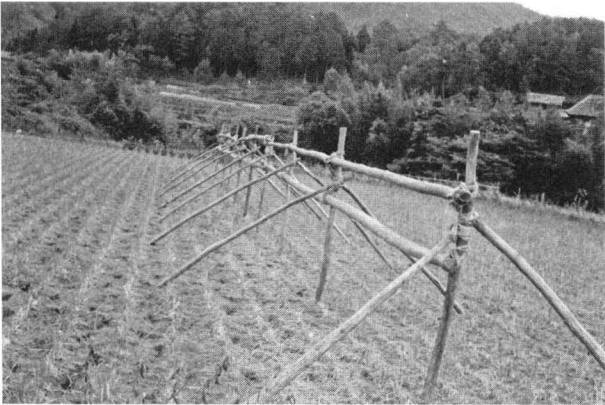


写真 19

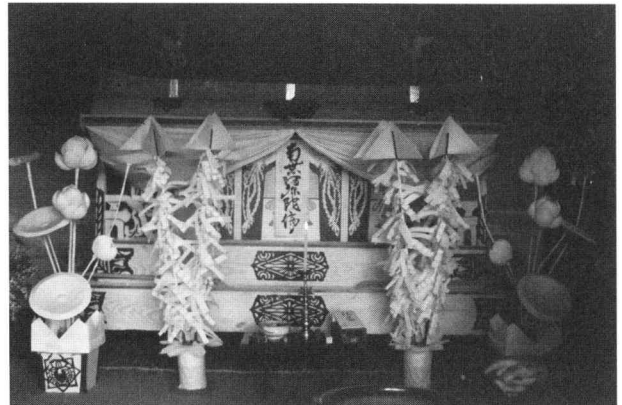


写真 20

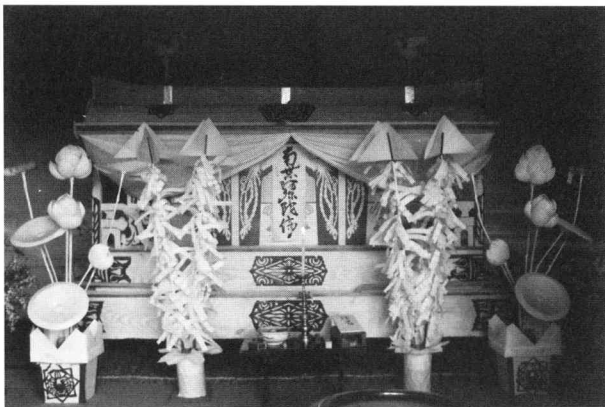


写真 21



写真 22



写真 23



写真 24



写真 25



写真 26



写真 27



写真 28



写真 29

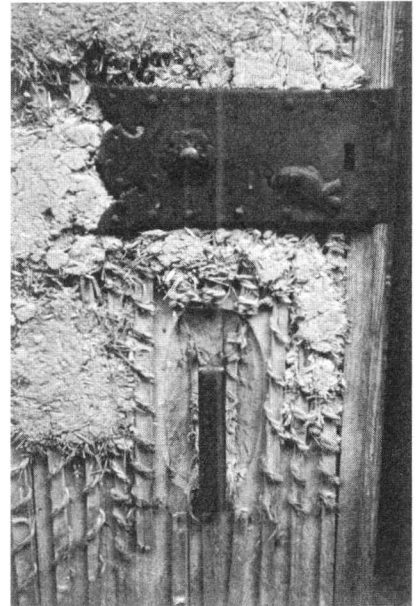


写真 30



写真 31



写真 32

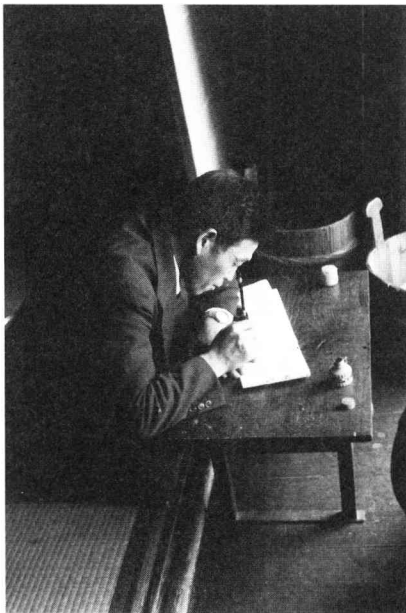


写真 33



写真 34



写真 35



写真 36

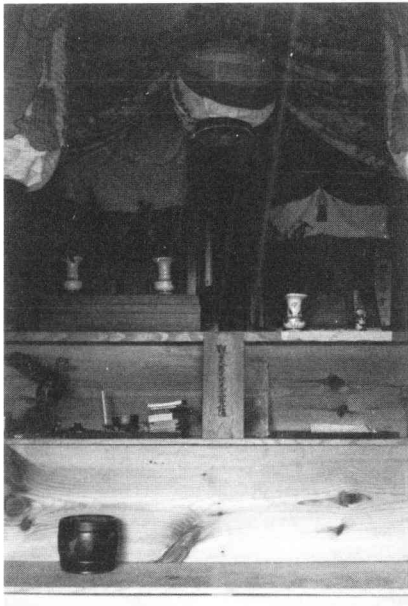


写真 37



写真 38



写真 39

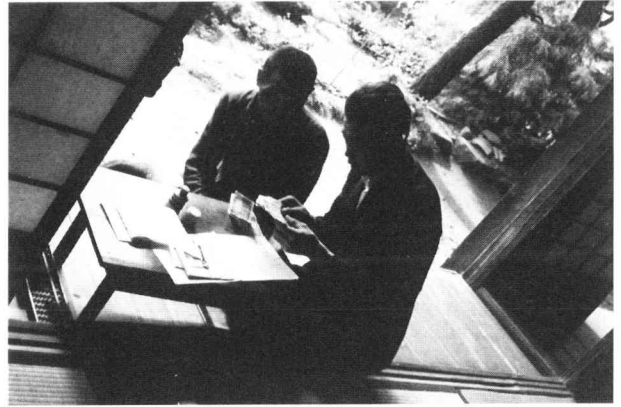


写真 40



写真 41



写真 42



写真 43



写真 44



写真 45



写真 46



写真 47

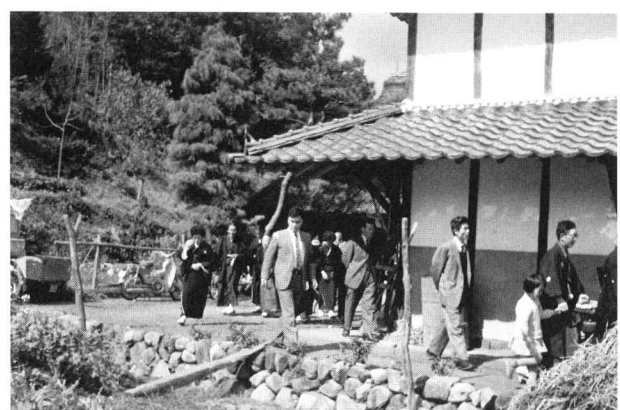


写真 48



写真 49



写真 50



写真 51

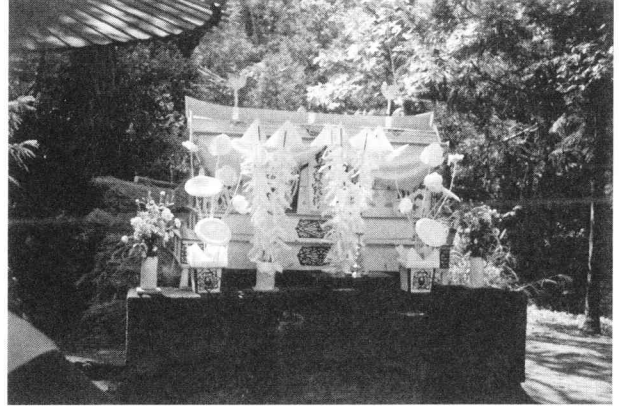


写真 52



写真 53



写真 54



写真 55



写真 56



写真 57



写真 58



写真 59

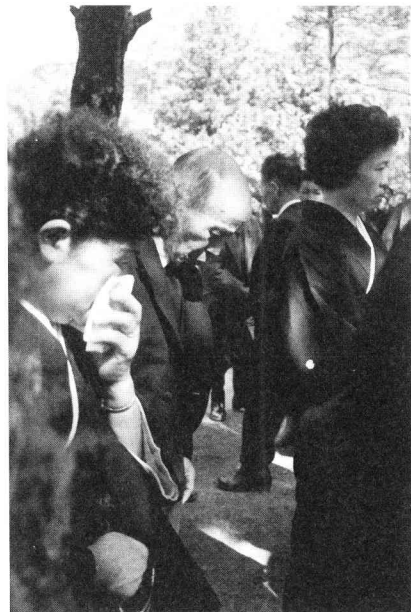


写真 60



写真 61



写真 62



写真 63



写真 64



写真 65



写真 66



写真 67



写真 68



写真 69



写真 70



写真 71



写真 72



写真 73



写真 74



写真 75



写真 76



写真 77



写真 78



写真 79

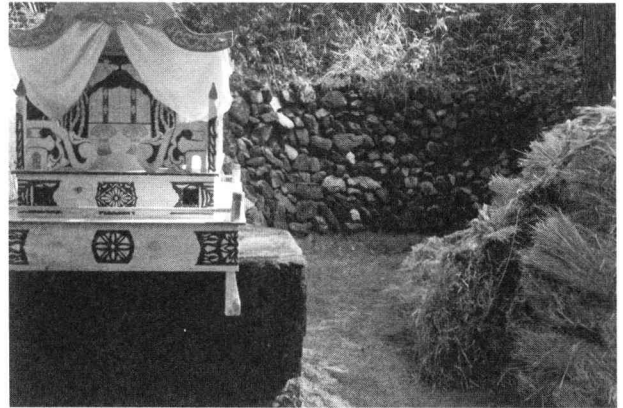


写真 80



写真 81

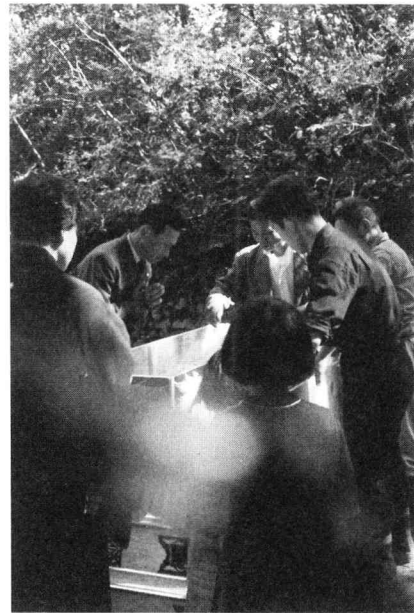


写真 82



写真 83



写真 84

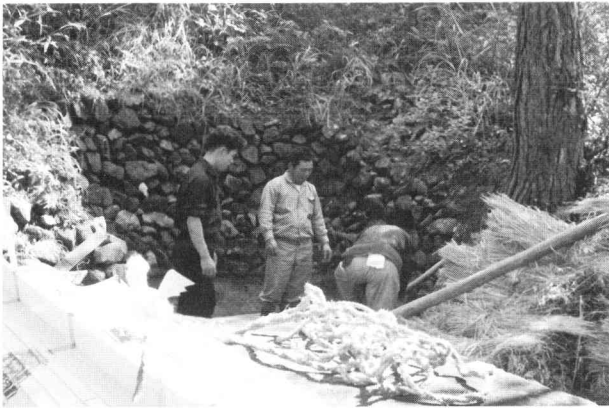


写真 85



写真 86



写真 87



写真 88



写真 89



写真 90



写真 91



写真 92

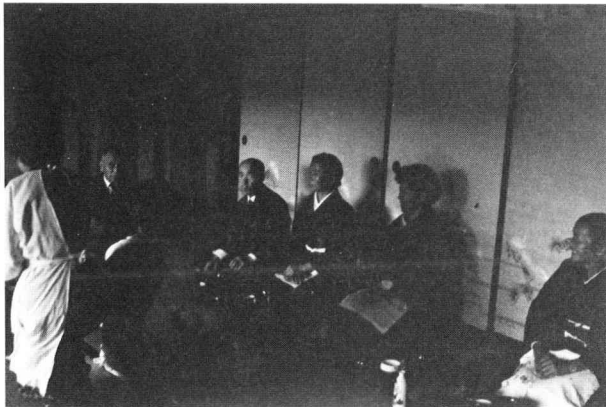


写真 93



写真 94



写真 95



写真 96



写真 97



写真 98



写真 99

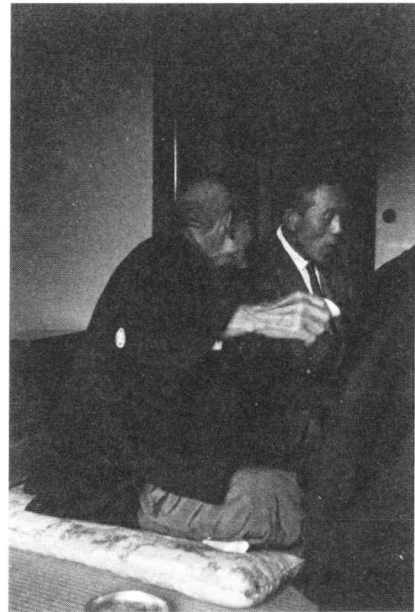


写真 100

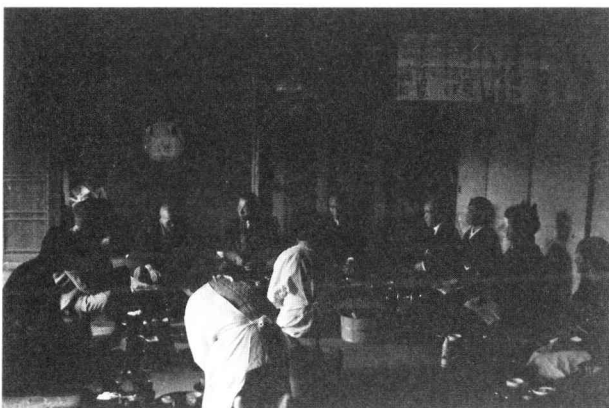


写真 101



写真 102



写真 103



写真 104



写真 105



写真 106